

慣用的英語表現の通時的意味変化の研究論文に見る教育的意義

—Akiyuki Jimura “Some Notes on Idiomatic Expressions in the History of English:
With Special Reference to ‘meat and drink’”—

守長 和人・地村 彰之・兼重 昇

本稿は文学研究の手法・過程に教育的意義を見出すためメタ分析を行うものである。分析対象は Jimura (2014) の研究論文“Some Notes on Idiomatic Expressions in the History of English: With Special Reference to ‘meat and drink’”と論文執筆者本人とのインタビューである。本稿では、研究論文を章ごとに区分したうえで、論文の構成(章順)と構造(各章の命題間のつながり)を分析した。分析の結果として、論文内では‘meat and drink’という表現が字義の意味から隠喩の意味へと変化する過程が記述されており、具体的には、様々な文学作品における言語使用を通時的に提示・分類されていることが明らかとなった。Jimura (2014) の研究論文は、語意の変遷を例とともに実証するという目的で書かれたものであり、元来教育的意義を示唆するためのものではないという前提はある。しかしながら、本稿は、その研究の手法・過程に潜む研究ロジックと教育的意義との関係性を見出すことを志向している。そのため、構成と構造の分析の後、論文執筆者本人とのインタビューをもち、研究ロジック及びその意図を探った。その後、研究ロジックや最終的なプロダクトである研究論文に行き着くまでの思考・作成過程を、研究者の一学習として読み替え、その学習が一般的な英語学習者に還元できるかを考察した。結果として、本分析における研究者の学習は、一般的な英語学習のうちとりわけ語彙(語意)学習に関連し得ることが明らかになった。この語彙学習は、学校教育における英語語彙学習の動機付けと多義語学習への意識付けに寄与できると考えられる。

キーワード：意味変化、イディオム化、英語語彙学習

The Educational Significance of a Research Paper on Diachronic Changes of English Idiomatic Expressions:

Akiyuki Jimura’s “Some Notes on Idiomatic Expressions in the History of English: With Special
Reference to ‘Meat and Drink’”

Kazuhito Morinaga, Akiyuki Jimura and Noboru Kaneshige

This present study conducted a meta-analysis on a highly-evaluated literary research journal article in order to discover educational significance in the methods and processes of literary research. As an example of a literary research article, Jimura (2014) was selected. In addition to the analysis and the interpretation of the article, conducted

was an interview with Jimura, the author himself. The first section divided Jimura's work into chapters, and analyzed its structure (i.e., the order of the chapters and the associations among propositions of the chapters). The analysis shows that the article describes the process of the diachronic change of the meaning of the expression 'meat and drink' from literal to figurative in various literary works. Understanding that the purpose of Jimura (2014) was to examine the changes of the word meaning using examples and not to give any educational implications, the current study aims to find educational significance from the research logic in the research method and process. For the purpose, both analysis of the composition and structure and an interview with the author were conducted to explore the research logic and its intentions. Based on the analyses, it is discussed whether the research logic and thinking and writing processes that led the author to the final product (i.e., the research paper) can be applied to an English learning process. As a conclusion, this present study demonstrates that the learning style of this researcher could be associated with that of an average English learner, especially in vocabulary learning. In addition, it may also contribute to motivating English vocabulary learning and raising awareness of polysemous words.

Key Words: Semantic Transformation, Idiomatisation, English Vocabulary Learning

1. 本稿の目的と研究論文の紹介

本稿では、言語領域における英文学の観点について、専門科学者の学びの過程（論文作成過程）と、大学院生による学びの過程（論文の読解過程）の相違について検討する。

その目的は次の2つである。

- ① 研究者の学びのプロセスの抽出
- ② 論文読者の学びと教育的還元

本稿は、Jimura (2014) による研究論文“Some Notes on Idiomatic Expressions in the History of English: With Special Reference to ‘meat and drink’”の読解を通して、論文の構成・構造を分析し、論文著者の「学習」過程を読み解くことを第1の目的としている。

ここで言う「学習」過程とは、論文著者が専門科学（研究）者として論文を書く上で、何を問題とし、どのようにその研究を進め、どのように学び、最終的なプロダクトとしてその研究論文に行き着いたのか、といった論文作成過程を指している。つまり、研究プロセスを地村氏の学習プロセスとして読み替えているのである。

本稿著者の推測によって再構築された研究プロセスは直接論文著者にインタビューをすることで確認し、構造に潜む研究ロジックを引き出していった。

第2の目的は、学校教師の立場に立ち、この研究論文の読解を経て、研究者の学びのプロセスを受け取り、どのような活用ができるのかについて考察していくことである。現場で教えている生徒にどのような還元が可能か、教育的意義に繋げていく。

対象となっている研究論文は先に述べた Jimura (2014) “Some Notes on Idiomatic Expressions in the History of English: With Special Reference to ‘meat and drink’”である。執筆者・地村彰之氏は、広島大学大学院文学研究科教授で、英国中世の詩人ジェフリー・チョーサー(1340?-1400)の英語を中心とし、古期英語から近代英語を経て現代英語に至る

英語表現の歴史的研究を専門とする研究者である。

本研究論文も英語表現の歴史的研究にあたるものである。一連の言葉の繋がりである‘meat and drink’に焦点を置き、その表現の意味が英語の歴史の上でどのように変化しているのかを見ているものである。具体的には、字義的な意味で使用されている用例を起点に通時的に見ていき、イディオムとして隠喩的な意味を持っている用例を提示することで意味の変化を論証している。

なお、地村氏は本研究論文において英語表現のイディオム化を中心に論を進めているが、イディオムが単語と単語の意味の総和ではないことに触れている。表現がセットフレーズとして用いられているその文脈やその場面のイメージから、新たな意味を持つようになっていく過程がイディオム化である。チョーサーをはじめとする著名な作家たちが自らの作品の中にその表現をうまく配置することで、字義的な意味と文脈の情景が有機的に繋がられていく。また、聖書の現代版においては‘meat and drink’という表現が現代人にも分かりやすいように書き換えられている。つまり、‘meat and drink’の隠喩的な意味が今現在では失われつつあることを示唆している。したがって、論文全体から、言葉に付加された意味は時代とともに不易流行していくものであることが伝わってくる。

2. 研究論文の構成と構造

本研究論文は次のように構成されている。

1. Introduction
2. The paired words ‘meat and drink’ in Chaucer
 - 2.1 ‘meat and drink’ in verse
 - 2.2 ‘meat and drink’ in prose
3. The paired words ‘meat and drink’ in Spenser’s *The Faerie Qveene*
4. The paired words ‘meat and drink’ in

Shakespeare's works

5. The paired words 'meat and drink' in Milton's works
6. The paired words 'meat and drink' as an idiom in Dickens
7. Conclusion

本研究論文は、1章から7章まで7つの章から構成されている。各章の内容を要約する形で以下に示す。

まず、1章「Introduction」では、元となる字義的な意味を次第に失っていったイディオム化のプロセスについて調査し、チョーサーからディケンズまでを含む多くの文学作品において特に'meat and drink'に焦点化することが述べられる。論文著者の専門であるチョーサーの作品にその表現が出てくることの確認から論がはじまる。

チョーサーの作品においては'meat and drink'は字義的な意味で用いられており、イディオム化はまだされていない。

1章以降において、その表現のイディオム化のプロセスを歴史的に辿るために、チョーサー、スペンサー、シェイクスピア、ミルトン、聖書、ディケンズに出てくる'meat and drink'の例を見ていくともここで述べられる。

1章内ではOED (Oxford English Dictionary)で'meat'を引き、'meat'が元来食べ物一般を意味していること、しばしば'drink'とandを挟んでペアになって使用されていたこと、また、そのペアの'meat and drink'が「こころからうれしいと思うこと」(堀他, 2011)という隠喩的な意味を持つようになったことに言及される。

OEDはその言葉の用例を初出から順に並べて提示してくれているので、食べ物一般を意味する'meat'が9世紀頃から19世紀まで見られたことが確認でき、その広い意味が狭まり、次第に「食肉」の意味で定着したことが確認される。次に、*to be meat and drink to (a*

person)「(人にとって)こころからうれしいと思うこと」といった隠喩的な意味が13世紀から19世紀にかけて、聖書に多く見られることも確認される。聖書は多くの人に読まれているものなので、聖書からこの表現が広がった可能性にも言及がなされている。

さらに、1611年のKing James Bibleでの'meat and drinke'という表現が1989年の改訂版聖書では'food and drink'や'eating and drinking'と訳されており、現在の英語話者には理解されない可能性が示唆されている。

2章「The paired words 'meat and drink' in Chaucer」では、チョーサーの作品内での'meat and drink'の用例が確認される。節を2つに分け、2.1 韻文、2.2 散文それぞれの作品で見えており、韻文では字義的な意味が、散文では隠喩的な意味で使われている可能性についてほのめかされている。

3章「The paired words 'meat and drink' in Spenser's *The Faerie Queene*」では、スペンサーの作品内での'meat and drink'の用例が確認される。スペンサーからの用例では原義を維持しつつも、時には隠喩的な使用が確認できることが論じられる。

4章「The paired words 'meat and drink' in Shakespeare's works」では、シェイクスピアの作品内での'meat and drink'の用例が確認される。シェイクスピアからの用例では'meat and drink'が既にイディオム化しており、研究論文中に示された3つの用例ではどれも「食べ物」や「飲み物」の意味ではなく「愉快的な」や「楽しい」の意味に近くなっていることが示されている。

5章「The paired words 'meat and drink' in Milton's works」では、ミルトンの作品内での'meat and drink'の用例が確認される。ミルトンからの用例には'meat and drink'ではなく、複数形で'meats and drinks'が見られ、字義的な意味で用いられていることが確認される。

6章「The paired words 'meat and drink' as an

idiom in Dickens」では、ディケンズの作品内での‘meat and drink’の用例が確認される。聖書の言葉がディケンズやシェイクスピアに多くの隠喩的な表現を提供したという Yamamoto (1950) の指摘が引用され、ディケンズの作品内では隠喩的な表現として使用されていることが確認される。

7章「Conclusion」では、2章から6章までがまとめられている。チョーサー、スペンサー、ミルトンでは概して字義的な意味で用いられており、聖書による隠喩的な意味の影響を受けたと考えられるシェイクスピアやディケンズでは隠喩的な意味で用いられていたことを踏まえ、結論として‘meat and drink’には2つの流れがあるとしている。つまり、1つは字義的な意味を保持しているものと、もう1つは徐々にイディオム化していったものであ

る。論文著者は、字義的な意味と隠喩的な意味のどちらにも解せる場合があるため、‘meat and drink’を取り囲む文脈に注意を払いながら読解することが必要であると締め括っている。

ここまで研究論文の構成にしたがってその概要をみてきた。研究論文著者の専門とするチョーサーの作品の中での‘meat and drink’に端を発し、まずは OED で原義から意味の発展を俯瞰的に確認した後、様々な作家の作品の用例を持つてくることで自己の論証に裏付けをしていく。そして最後に、結論としてまとめている(図1参照)。また、作家それぞれは彼らの生きた時代によって通時的に並べられており、時系列に従って論証が進められていたことが確認できる。

1章 導入 - Chaucer - OED - 聖書	2章 Chaucer 1343-1400 2.1 韻文 2.2 散文	3章 Spenser 1552-1599	4章 Shakespeare 1564-1616	5章 Milton 1608-1674	6章 Dickens 1812-1870	7章 結論
--	--	----------------------------	--------------------------------	---------------------------	----------------------------	----------

図1 Jimura (2014) の論文構成

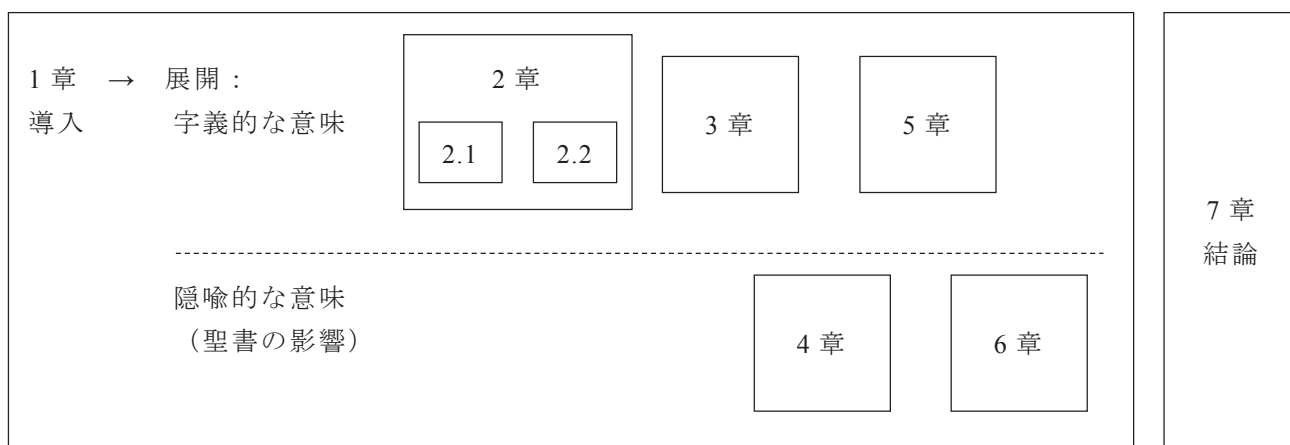


図2 Jimura (2014) の論文構造

3. 専門科学（研究）者の学習過程の再構成

ここでは、論文著者が本研究論文を執筆するにあたり、その研究をどのように進め、どのように学び、最終的な結論に行き着いたのかを推測することで研究者の学習プロセスとして読み替えている。この学習プロセスは論文著者以外の本稿著者によって研究論文の読解から推測されたものと、その後直接論文著者（地村氏）とのインタビューを経て再び再構成されたものという2つの段階がある。以下に示す。

3-1. インタビュー前の再構成

（論文著者以外の本稿著者による解釈・推測）

先に示した図1や図2からも分かるように、本研究論文では時系列に沿ってチョーサーをはじめとする作家たちの作品の中で、‘meat and drink’を含んだ用例に触れ、その意味が字義的なものであるのか、隠喩的な意味であるのかが丁寧に確認されている。

地村氏の専門はチョーサーを中心とした英語表現の歴史的研究であるので、チョーサーの作品を読んでいる中で‘meat and drink’という表現に興味を惹かれたのだと予想した。しかしながら、数あるイディオムの中でなぜ‘meat and drink’に焦点化したのかという理由については本研究論文上からは読み取れない。

1章でOEDにより、原義や隠喩的な意味がどういった時代幅で用いられているのかが概観された後、2章ではチョーサーの作品を韻文と散文とに分けて‘meat and drink’の出現が確認される。3章以降6章まででは通時的に作家を並べ、それらの作品の中で字義的な意味で使われているのか、隠喩的な意味で使用されているのか、用例とともに一つひとつ丁寧に確認がなされていく。そして、7章では結論として、‘meat and drink’という英語表現の周りの文脈に注意して意味を確認することを述べている。

つまり、ここで推測される研究者の研究過

程（学習過程）は、専門であるチョーサーの作品を出発点に‘meat and drink’という表現が他の作品では字義的・隠喩的のどちらで使用されているのかを確認していく作業である。通時的に見ることで、意味の変遷が時代とともに流れていることを学習していると言える。OEDによる初出から、それぞれの作家を引き合いにして近代に至るまで、通時的に実例の紹介と文脈の説明をすることで、読み手への訴えかけがより力強いものとなっている。Q & A という論証スタイルではなく、一つずつ確認し、読み手にもその確認の手順を踏ませることで、自らの論証スタイルを納得させるという技法となっている。

また、本研究論文のその研究領域における位置付けと論文論証スタイルについては、語源学に属し、通時的論証スタイルが一般的なのだと推測した。

ここまでは論文の読解から読み取れる研究者の研究過程（学習過程）である。しかしながら、論文の読解からは読み取れない隠された研究過程がある。それらを確認するため、以下のような質問項目を用意し、インタビューに臨んだ。

（研究論文著者へのインタビュー質問内容）

- ・ 語源を探る上でなぜ‘meat and drink’に目をつけたのか。
- ・ 語源学に関する論文の基本的な章立てのスタイルとはどのようなものか。
- ・ その基本的な章立てに対して、本研究論文での章立てとは違いがあるのか。
- ・ 論文を研究成果として書き上げるまでの過程として、章立てに関してどのような意図や試行錯誤、リアレンジなどがあったのか。
- ・ 章立てに関して個人的好みはあるのか。
- ・ 本研究論文に紹介されている作家たちはどのような視点で選定されたのか。
- ・ 同様な研究をしている他の研究者との連

携や相談など、横のつながりはあったのか。

- ・ 文学研究における語源学研究の意義とは何か。
- ・ 教育学的意義は含まれているか。

3-2. インタビュー後の再再構成

(論文著者との確認)

ここでは、前節で整理した内容を踏まえ、研究論文の著者である地村氏にインタビューをし、推測された学習過程の答え合わせをするかたちで再度、学習プロセスを再構成していった。

(本研究論文の目的)

まず地村氏が述べられたことは、本研究論文を書いた目的についてであった。それは、本研究論文が日本人のための英語の教材開発を目的として書いたものではないという点であった。しかしながら、これを読んだ人が教育的な意義を見出し、還元できるならばそれはありがたいことであるとも付け加えられた。

論文著者によると、この研究論文の目的は、語の意味の移り変わりを見ることであった。良いかどうかは別として、論文を通して自分がおもしろいと感じたものを読者にも共有してもらいたいとの思いから執筆をしている。

(本研究論文の位置付け)

寺澤芳雄氏の英語語源辞典などは参考として見ることはあるが、語源学という領域における研究論文として書いたという意識はないとのことであった。

(語の選定にあたって)

地村氏は身近な言葉からの出発を試みており、もちろん‘meat and drink’も字義的に見れば「飲み食い」であり、今も昔も変わらないものであるので身近な言葉に含まれる。

研究論文上では‘meat and drink’を選んだ経

緯について全く触れられていないが、今回のインタビューで研究者である地村氏のこの表現との出会いから、それを巡って様々な作品にて調べられたこと、そして最終的にシェイクスピア、スペンサー、ミルトンといった著名な作家を含めて論文を完成されていることが理解できた。詳細は以下で述べる。

(‘meat and drink’という表現との出会い)

研究論文で焦点を当てた ‘meat and drink’ という英語表現との出会いは、昔チョーサーのカンタベリー物語をテキストとして大学生に授業で教えていた頃だという。地村氏にとってはそれまで何度も読んで目にしているはずの表現であったが、当初はあまり意識をしていなかったようだ。もちろん、授業を受講している学生にとっては初めて目にするテキストであったが、‘meat and drink’が雪の降るイメージと重ねられて描写されていることを授業中に説明する上で、多少なりとも印象に残っていたのかもしれない。それはカンタベリー物語の序章で、ある人物描写の中に使用されていた表現であった。以下、その一節を、3つの参考文献から訳とともに引用して示している。

Withoute bake mete was nevere his hous

Of fissh and flessch, and that so plentevous,
345

It snewed in his hous of mete and drynke,

Of alle deyntees that men koude thynke.

「家には食べ物飲み物が雪のように降っていた。」

(神戸海星女子学院大学編著, 1981,

下線は本稿著者が付した)

「家では（魚や肉のパイを欠いたことがなく、しかも、）あり余るほどの肉と酒（、あらん限りの山海の珍味）が雨あられと降り、」

（笹本、2002、（ ）は本稿著者が付した）

「（家には魚と肉に果物、それにまた香料を入れた焼きパンがいつも備えてありましたが、それもじつにたくさん、）家には食べ物に飲み物（、人が考える限りのありとあらゆるご馳走）がまるで雪の降るばかりに積っておりました。」

（榎井、1995、（ ）は本稿著者が付した）

時を同じくして、地村氏は大先輩にあたり学士院賞を受賞されたディケンズ研究者の山本忠雄氏から続く、ディケンズレキシコンプロジェクトに関わった際、そのディケンズの作品の中から集められた語彙集の中に‘meat and drink’が含まれていることに気付く。山本氏はどちらかと言えばチャーサーからではなく、むしろシェイクスピアや19世紀のディケンズの作品を含む18世紀以降の作品からの影響を受けてこの用語を取り上げていた。地村氏はこの時、18世紀よりも古いチャーサーの作品の中にも‘meat and drink’という表現があるのではないかと驚きとともに、一層興味を持つようになっていく。

（他の研究者との連携）

チャーサーはヨーロッパの作家たちにも影響を受けているが、イタリア人のチャーサー学者で、特にチャーサーの作品における自然描写を専門に研究をしているポイタニ氏に、先に見た、雪のイメージについて尋ねて見たところ、その表現についてはあまり言及が得られなかったという。これは論文でも注釈として入れられているところである。つまり、これまでの研究の中で‘meat and drink’という表現はあまり取り扱われていない点であると認識し、今回の語の選定として見ていくことを決心されたのだった。

次に手をつけたのは OED であった。OED では多くの用例を時系列に並べてくれているので、そこでの記述説明がどういったものなのかを確認した。しかしながら、歴史的にどのように変化しているかを概観するには分かりやすくとも、OED での用例が全てではない。そこで、チャーサーとディケンズの間にある約400年以上の時差を埋める形で、様々な作家の作品に当たり、‘meat and drink’という表現を探すこととなる。

（本研究論文の構成）

厳密な科学論文の場合は先行研究、先行研究での問題点、研究課題 (RQs)、調査・実験、結果・分析、考察、示唆・結論というように、フォーマットとして章がある程度決められているかもしれないが、今回のこの論文はより基礎的な構成になっており、問題提起・展開・まとめ、であった。

問題提起で、チャーサーのテキスト内の‘meat and drink’を持ち出し、展開で、各作家の用例を見、まとめで締め括るという流れである。特定の論文の書き方というのを念頭に置いたものではなく、一般の論文の書き方で、起承転結に則ったものであった。今回は「転」の部分でどのような意味的変遷があるのかを述べている。歴史的に見ていくと、文字通りの意味から隠喩的な意味に移行していることが「転」と言える。しかし、転じていると言いつつもその2つの意味が同居している場合もあるので、文脈に注意した読解が必要なことをまとめとしている。

加えて、定型の章立てに合わせるのではなく、研究者それぞれに論証スタイルがあり、完成した論文を通して自分の論の構成が読者におもしろいと思ってもらえるものであるならば、そういったものを認めてもらうという論じ方も良しとする考えを持たれていた。

（作家の選定・順番）

本研究論文を書く前の段階ではディケンズレキシコンプロジェクトの関係上、チャーサーとディケンズのみで、その間の約400年余りに位置付けられる作家の用例は見られていなかった。チャーサーとディケンズの2つがまずあって、それらを補完する形で間に各作家の用例が入れられていった。

論文構成のリアレンジについても様々な推敲を経て、この最終的な論文となったことが今回のインタビューを通して明らかとなった。

(Appendix の役割)

紙面では扱えなかった用例を Appendix に付している。近年のコーパスの発達の恩恵を受け、データとして多くの文例を提示することが可能となってきている。つまり、さらなるエビデンスとして論を補うために追加の用例を Appendix に加えたのである。

また、Appendix に掲載しているそれぞれの例から、どういう傾向にあるのかといったことについては、分かる範囲のことは論じられているが、この論文を読んだ他の研究者の中にはさらに解釈を付け加えることができる人もいるかもしれない。そのような際には、この論文を起点としたさらなる研究論文が出てくること望んでいる、とのことであった。

(文学研究における意義、表現の意味を遡っていくことの意義)

語源学という難しい用語で示されるような研究領域ではなく、むしろどういう言葉が英語の中に入ってきたのかということに興味を示されていた。日本語の場合を考えても、外来語経由のカタカナ語が氾濫した状態である。なぜそれだけカタカナ語が必要であるのか。多くの理由が考えられるが、時代の流れ、例えばコンピュータ用語がカタカナであるとか、日本にないものがカタカナで紹介されているとか、日本語にあるとしてもカタカナの方が表現の仕方がエレガントに聞こえたり使い

やすかったりもする。このように、日本語の中のカタカナに当たるものが、英語の中に入ってきている外来語の存在なのである。チャーサーの英語の時代もフランス語やラテン語といった外来語の影響を受けて、言語が変わってきていることに気付かされる。それには当然、歴史的な流れの影響も受けている。

語源という難しい言葉ではなく、アングロサクソン時代からずっと使われてきた言葉と外来語の要素がどのように組み合わせられて英語の中で存在しているのかに興味をひかれる。作家たちがある言葉を意図的に作品の中で使うとき、意識的にその言葉を使っているとしたら、それに込められた意味を少しでも理解したいとの考えを持たれていた。

(教育的意義)

学校教師がこの論文を教材研究として読んだ場合、言葉一つひとつが字義的な意味だけでなく、そこから派生した意味の広がり部分＝隠喩的な意味までを含み、その両方の理解に及ぶまでのプロセスを高校生に還元することが考えられる。

学習者たちは英語を学習する際に辞書を引くが、そこで目にする意味の中には字義的な意味と隠喩的な意味の両方が出ている場合が多い。なぜ複数の異なる意味が同じ語を用いた表現から出てくるのだろうと疑問を持ったり、それに興味を持ったりする者も出てくるだろう。原義を離れた意味に転ずるイディオム化の過程に想いを巡らせることによって、そのイディオムの学習・習得がより容易になるのではないだろうか。たとえイディオム化された場合の隠喩的な意味を知らなくても、推測することができ、その意味推測力は、語彙の多義性への意識付け、未知語の意味の推測にも有用であると考えられる。

中学校や高等学校での発問例：
‘meat and drink’

文脈とともに提示し、「ここでの meat とは どう意味でしょうか。」という発問をすることが考えられる。生徒から「meat=食べ物一般」という意味は出てこないだろうが、この問いからやりとりを進めていくことはできる。この表現には、drink という語もあり、meat と drink が意味を相補っていると考えれば「肉」以外の意味を持つことを想像させることが可能となる。生徒から「肉」の意味ではなく「食べ物一般」を指すという反応が引き出せれば問いかけは成功である。

以上のことから、学習者たちには文脈から判断し、自分の知っている語の意味を越えたイディオムの意味の推測ができるように促していきたい。推測する楽しさから言葉自体に興味を持たせ、言葉の意味が歴史的に変化していくものだという知識も持たせたい。

最後に

地村氏はこれまでに同様の論文として、方言の使用や否定を表す un-の接頭辞についても取り上げたことがあったようだ。自分でテキストを読んでいて「ん？これは！」と思え

るものでなければ興味がなかなか湧いてこない。十人十色の感じ方、捉え方があって良いとの考えである。自分自身がおもしろいと思った言葉の意味を、読者にはじっくりと考えてもらいたい、ということであった。

本研究論文で紹介された著名な作家たちが聖書などに出ている言葉の影響を受け、自分たちの作品の中で新たに意味付けて使用している点で、人と人が関わりあって新しい意味が形成されていると言える。有機的に新たな意味が広がっている。

本稿著者も大学の授業でディケンズのクリスマスキャロルを読んでいる際、as dead as doornail という表現と出会い、そのような言い回しがあるのかと衝撃が走ったのを覚えている。この例と同じように、受け手への衝撃が新たな派生を生むことがあると考えられる。言葉との出会いから、自分もその言葉を使ってみたいという気持ちを持たせたい、とのことであった。

以下表 1 では、ここまでで見てきた内容をまとめている。

表 1 インタビュー前後での再構成と教育的意義との関連

研究論文から読み取れること	インタビューから新たに発見されたこと	教育的意義への還元 (学校教師の立場から)
<ul style="list-style-type: none"> ● 字義的な意味と隠喩的な意味の使用について時系列に確認していく ● 字義的な意味と隠喩的な意味を文脈から判別する ● 言葉の歴史的意味の変遷 	<ul style="list-style-type: none"> ● 目的と位置付け ● 表現との出会い ● 他者との関わり ● 章立ての推敲 ● 作家たちの選定 ● 教育的意義 	<ul style="list-style-type: none"> ● 語彙学習への動機付け ● 言語についての知識・理解 ● 辞書指導 ● 意味の推測を促す発問

4. 教材開発への示唆

この章では、前章までの研究者の学びを受けて、学校教師が研究論文から研究者の学習過程を読み解き、現場で教えている生徒にど

のような還元ができるのか、教材開発の視点からその可能性について述べる。

まず、英語のイディオム表現は中・高校生にとっても英語を学習する上で習得の必要に

迫られるものである。しかしながら、イディオムは字義的な意味を離れているため、その表現とそれに対応する日本語訳だけから学ぶのは難しい。今回地村氏は研究論文において、語に興味を持ち、歴史的に見ていくことでイディオム化の過程を押さえていた。‘meat and drink’はもともと食べ物・飲み物の意味であったが、それに祝宴などでのイメージが付され、「この上ない喜び」という意味に転じていることを確認していったのである。このように、意味の変遷を自ら理解し説明することができれば、イメージの力を借りて字義的な意味と隠喩的な意味の両方を学習しやすくなる。これを教材開発に結びつけたい。

学習者に学ばせたいことは以下の3点である。

- 言葉への関心
- 語の多義性に対する寛容性
- 表現の意味の推測力

教材開発への示唆をする前に、いくつかの教材を探してみると既にイディオムを扱った参考書や教材が見られた。

例えば、マーヴィン・ターバン [著] 松野守峰・宮原知子 [共訳] の参考書で *Piece of Cake* を見ると以下のようにイディオムについて例文と直訳、意味、由来が書かれている。

Piece of Cake 楽勝でできること

“Don’t worry. Skateboarding down this hill is a piece of cake.”

「心配するな。この斜面をスケボーで滑り降りるなんて、朝飯前だからさ」

直訳—1切れのケーキ

意味—とても簡単で、快適な作業のこと

由来—19世紀中頃に行われていた、アフリカ系アメリカ人のダンスコンテストに由来すると考えられる。出場者は脚を高く上げたり、複雑なステップで競い合い、優勝者は賞品としてケー

キをもらった。このダンスは“the cakewalk”「ケーキウォーク」と呼ばれ、“That takes the cake.”「お見事」という表現も生まれた。関連表現に、“easy as pie”「いとも簡単な」がある。

他にも、J. B. スミスバック・C. Y. スミスバック [著] 小西康夫 [訳編] 『絵で読む・イディオム 口語英語活用事典』では、イディオムについてイラストが加えられている。これは視覚的に訴え、理解や記憶を促している。

また、大学用の教材であるが、テーマ毎にイディオムをまとめたものも見られた。

しかしながら、上記で示した例に足りていないのは発問である。ただ単にイディオムを意味とともに説明するだけでは学習者は終始受け身となってしまっている。

学校教師は、イディオムの意味が推測可能なレベルの文脈を生徒に与え、適切な発問とともに答えに導いていくことで教育的な指導を行うことができると考えられる。言葉に対して意識をさせ、イディオムの意味に行き着けるよう促す発問が、学習者にも語彙の意味の変化を追体験させ、より一層の興味を持たせることだろう。そうして学習者は言葉の持つ意味がいくつかあることを知り、そういった多義語に対する意識付けが、文脈からの未知語の意味の推測にも役立てられると考えられる。

コミュニケーション能力の育成が一層求められている昨今、学習したことを表面的な理解のまますぐにアウトプットするよう促しがちであるが、少し立ち止まって英語表現の持つ意味の広がりや文脈に考えを巡らせることも時には必要ではないだろうか。

主要引用参考文献

Jimura A. (2014). Some Notes on Idiomatic Expressions in the History of English: With Special Reference to ‘meat and drink’. In Y. Iyeyri and J. Smith (Eds.), *Studies in Middle*

and Modern English: Historical Change (pp. 115-132) . Osaka: Osaka Books Ltd.

神戸海星女子学院大学編著 (1981) 『チョーサーのキャンタベリー物語 総序の詩』中央出版社。

笹本長敬 (2002) 『キャンタベリー物語 (全訳)』英宝社。

スミスバック, J. B.・スミスバック, C. Y. [著] (1997) 小西康夫 [訳編] 『絵で読む・イデオム 口語英語活用事典』北星堂書店。

ターバン, マーヴィン [著] 松野守峰・宮原知子 [共訳] (2002) 『語源で覚える最頻出イデオム 意味がわかればこんなにキャンタン!』講談社インターナショナル。

堀正広・田畑智司・今林修・西尾美由紀・地村彰之 (2011) 「*The Dickens Lexicon Project* と *Lexicon* の利用法—コンピュータを利用した英語学習と研究の紹介を含む—」大阪大谷大学英文学会『英語英文学研究』第 38 号。

梶井迪夫 [訳] (1995) 『完訳 キャンタベリー物語 (上) チョーサー作』岩波書店。

著者

守長 和人 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

地村 彰之 広島大学大学院文学研究科

兼重 昇 広島大学大学院教育学研究科